

これまでに出了された主な意見

議論の視点	委員意見	考えられる検討項目
確かな学力と体力の向上	<p><<学力>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる「ゆとり教育」に基づいた学力観が大切。 ・企業では、グローバル化など社会状況に対応していくために、いろいろな目線を持った人材が必要。 ・最近の新入社員は、基礎能力は高いが、対応力・応用力がない。 ・自分で考え、やり抜くといったことが学校教育の中で教えられてない。 ・市民にとって教育イコール学力向上を指している。 ・子どもの生きる力、育つ力、育とうとする力を育てることが大切。 ・幼保の連携、幼保小の連携を図りながら幼児期を育成し、小学校に送り出すことが必要。 ・学力、体力については、何のために学力なのか、何のために体力なのかを明確にすべき。 ・「学校って何だろう」「勉強は何のためにするの」ということの議論が必要。 <hr/> <p><<健康・体力>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの成長に遊びが必要。 ・最近の子どもは、異年齢の集団の中での経験 家庭や地域の中で自分の役割を果たすという経験 自然の中で思い切り遊ぶという経験が不足している。 ・学校保健の問題として、性教育に対する重点的な教育が必要。 ・子どもの生活リズムづくりの教育や啓発が必要。 ・生活習慣の乱れから男子は肥満が増えており、女子は、思春期の痩せが問題になっている。 	<p>家庭との連携や基本的な生活習慣向上の方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭への要請のあり方 ・学校での取り組みのあり方 ： <p>教員がより力を発揮し教育に専念できるあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもと向き合う時間の確保（教員の負担感の軽減、家庭への要請） ・教員の指導力発揮、資質向上 ・優秀な教員の活用 ： <p>専科教育や小中連携などの一貫的教育のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門性のある教員による授業 ・連続性のある取り組み（幼保小連携、小中連携、高大連携など学校種間の連携）（学習内容の精選、文化・芸術活動、小1プロブレムや中1ギャップ解消に向けた取り組み） ：
子どもの特性を伸ばす	<ul style="list-style-type: none"> ・企業では、グローバル化など社会状況に対応していくために、いろいろな目線を持った人材が必要。（再掲） ・職の能力を身につけた子どもを育てることが大切。 ・画一的な教育ではなく、子どもが持っている良いものを伸ばすことが大切。 	<p>部活動の振興や体力の向上の方策</p>
学校の力をさらに高める	<p><<学校>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校は、外部評価等をもって襟を正す姿勢が大切。 ・教育困難校への対応が放置されている。 ・教育方針の変更のサイクルが短いと教員の持つ力が発揮できない。 ・学校における業務のダイエツト化の推進。 ・学校が教育活動に専念できる体制の確立。 ・学校任せの体質改善。 ・教員と保護者が同じ思いで子どもに接しなければならない。 ・10年前に比べ、家庭からの苦情や要望の件数は10倍以上、教育活動以外の業務が1.5倍くらいに増えている。 ・「学校って何だろう」「勉強は何のためにするの」ということの議論が必要。（再掲） ・学校は、「自分がやりたいことを見つける」「夢を見つける」場所である。 ・来年度からの35人学級の実現にあたっては、病気代替の確保も含め人材の確保が必要。 ・次々に新たな施策を打ち出されても、既存の施策を整理してもらわないと学校現場は太刀打ちできない。 <hr/> <p><<教員>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の子どもと向き合う時間の確保が必要。 ・教員には、「教える」だけでなく、「育てる」という気持ちも大切 ・指導力だけでなく、規範意識・社会常識が不足している管理職を含めた教員の資質向上。 ・学校が抱える課題解決には、教職員の意欲・情熱・指導力等の発揮が必要。 ・教員の子どもと向き合う時間の確保が重要。 ・教育のあり方、教員の姿勢・能力も大切だが、教員の絶対数が足りない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動の活性化策（地域人材の活用） ・学校での取り組みのあり方 ・地域ができる取り組み ：

議論の視点	委員意見	考えられる検討項目
<p>学校や地域の教育活動を市民の力で支える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の子どもに対する保護、指導ができていない。 ・保護者の物事の考え方や、物へのこだわりの価値観が変化している。 ・大人の規範意識・社会性の欠如が子どもに現れている。 ・中学生の保護者のPTA活動等への意識が希薄。 ・いじめなど、何か起きたときに、わが子のこのように考える保護者の育成。 ・学校に理不尽な要求をする保護者の増加。 ・子どもの心が見えていない保護者の増加。 ・しつけなど、親としての責任を果たさないといけない。 ・駄目な親と決めつけず、かわり続けていくことの必要性。 ・子どもたちが主体となった活動ができる場を大人が保証してやるのが大切。 ・地域社会が共同体であるという意識が希薄化している。 ・政令指定都市である北九州市の場合、地域コミュニティというのをどれぐらいのレベルで立ち上げていくかを考える必要がある。 ・時間的な制約や安全な遊び場が少ないため子どもが放課後に遊んでない。 ・子どもの育ちには、高齢者や地域の方の支援が必要。 ・家庭や学校、地域がその役割を十分果たせるような環境整備が必要。 ・子どもたちは地域や家庭から見放されている状況にある。 ・地域の役員は、北九州市の三層構造の中でいろんな事業が下りきて、とても疲弊している。 ・子どもの安全・安心（校内・登下校・外遊び）の視点が欠けている。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」にしても、親がそれを見守ってあげられる環境にないと難しく、企業・経済界へのアプローチが必要。 	<p>コミュニティスクールなど地域参加のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクールヘルパーのさらなる活用策 ・地域の意見を学校運営に生かす方策 ： <p>放課後子どもプランなど放課後の居場所づくりのあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提供すべきメニュー ・地域人材の活用のあり方 ：
<p>心の育ちの推進 (青少年の健全育成を含む)</p>	<p><<規範意識>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係能力、コミュニケーション能力、一般の社会常識、規範意識、あるいは礼儀、目上に対する言葉遣い、態度といった素養を身につけなければならない。 ・最近の子どもは、異年齢の集団の中での経験 家庭や地域の中で自分の役割を果たすという経験 自然の中で思い切り遊ぶという経験が不足している。(再掲) ・生活体験をすることで、責任感や協調性が培われ、危険回避や社会のルールが体得できる。 ・学校では社会性を身につけてくるのが大切。 ・現在の教育は、知育・体育が優先され、徳育が軽視されている。 ・保護者の物事の考え方や、物へのこだわりの価値観が変化している。(再掲) ・大人の規範意識・社会性の欠如が子どもに現れている。(再掲) ・保護者と教育の現場に携わる先生とが、毅然とした態度で子どもと接していかなければならない。 ・人と競い、優劣を付けることが悪いことのように言われるが、勝ち負けによって己を知って、向上心を持つことができるという一面もある。 ・スポーツの基本は、ルールを守る、礼儀を知る、鍛錬するなど、人としての基本でもある。 ・しつけは、義務付けない、押し付けない、気付かせることである。 ・子どもは親がしつけるものであり、学校は教育をする、その線引きが必要。 <hr/> <p><<不登校、いじめ、校内暴力等問題行動>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・就学前の子どもが小学校、中学校へいかにスムーズに上がっていくかが大切。 ・教育困難校への対応が放置されている。(再掲) ・家族と触れ合う時間を奪われ、安定を欠く子どもができて仕方がない社会状況がある。 ・いじめや不登校に加え、怠学への対策も必要。 <hr/> <p><<健全育成>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・非行を犯した少年を抱え苦しんでいる家庭への支援が必要。 ・保護者の子どもに対する保護、指導ができていない。 ・保護者の愛情の希薄化がキレる子どもにつながっている。 	<p>青少年健全育成や心の育ちを支援する方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かの心の育成と規範意識の醸成 ・いじめ、不登校、怠学対策のあり方 ・健全育成 ・家庭への要請のあり方 ：

議論の視点	委員意見	考えられる検討項目
特別支援教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・少子化やライフスタイルの多様化により、子どもが悩みを抱えるようになっているが、それを親が気付いていない。 ・通常の学級に6.3%いると言われている特別な支援が必要な子ども一人ひとりの実態に応じて、社会参加 ・自立できるようなシステムが必要。 ・少し気になる子どもは、幼稚では同じクラスでも、小学校では特別支援学級に入らないといけない。 	<p>障害のある子どもへの支援体制のあり方や教員の専門性の確保の方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育推進に向けた全市的な体制の整備 ・特別支援教育の場や教育環境の整備 ・一人ひとりの教育的ニーズに応える教育の推進 ・教員の専門性の向上と関係者への理解推進
その他	<p><<行政への意見>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会と関係部局との連携が必要。 ・教育は、方針を頻繁に変えないことが重要。 ・手厚い子育て支援策が、子どもと親の関わりを妨げ、結果として様々な問題を起こしている。 <p><<改革会議への意見>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員間の課題の共有化を図ることが重要。 ・意見が対立する場合は、それぞれの視点を大切に、両論併記もあろう。 ・総論で臨んでしまうと、抽象的な議論になってしまう。 ・提示されているテーマに対し、北九州市のデータをつぶさに出してもらい、課題を共有化した上で議論する必要がある。 ・「なぜ今特別支援なのか」「なぜ今コミュニティスクールなのか」「なぜ放課後居場所づくりなのか」という必要性も議論する必要がある。 ・家族である意味だとか、家族というそのものを取り戻していくような、ことまで視野に入れて議論すべき。 ・教育、子育て日本一というのは、どういう指標をもって日本一と考えるのかということ意識した議論も必要。 ・総論や目標を議論すると抽象的になってくるので、具体的な例だとか、現実的な課題を意識しながら、総論や目標のイメージをつけて、最終的にまとめていきたい。 <p><<その他の意見>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育現場に刺激を与えるべきとの考え方から、教育界のことを理解してもらおうという考え方に変わってきた。 ・子どもたちが本来持っている力は弱まってない。 ・文化芸術への視点が必要。 	